国際地域学会の活動について

河野 博忠

1. 国際地域学会の沿革と現状

1) 国際地域学会の沿革と目的：

国際地域学会（The Regional Science Association International=The RSAI）は、1954年（正確には、at the Meetings held in Detroit, Michigan, Dec.27-29,1954）にDr.Walter Isardによって創設され、45年の歴史をもつ国際学会であり、“地域に関する総合的で学際的な学術の進展を図り、会員相互間および関連諸機関との交流の場を提供し、地域科学の進歩・発展に貢献すること”を目的としている。

2) Three Super Regions と International Conferences：

The RSAIの直接の下部機構として、アメリカでの The North American Regional Science Association、ヨーロッパにおけるThe European Regional Science Association、そして環太平洋での The Pacific Regional Science Conference Organization (=PRSCO) のThree Super Regionsがあり、それぞれはNorth American Meeting（今年はThe 46thのそれ）、European Congress（今年はThe 39th）、およびPacific Conference（今年はThe 16th<隔年>）を開催している。これとは別に、20年前（at the Harvard University, June 14-15,1980）から文字どおり、The RSAIの国際大会としてWorld Congressを4年に1回開催している。日

本は1996年に東京で The 5th World Congress of the RSAIを開催した（河野が組織委員長であった）。

The PRSCOには日本（Japan SectionまたはThe Japan Regional Science Association）をはじめ、アメリカ西海岸のWestern Regional Science Association, Canadian Section, Australia=New Zealand Section, Korea RSA, Chinese RSA-Taiwan, and Mexican Section（正式にはAMECIDER）が加入している。European RS Association にはイギリス、オランダ、ドイツ、フランス、イタリア、スウェーデン、オーストリア、スペイン、ベルギー、スイス、ギリシャ等が、NARSAには、U.S.A.におけるNortheast、Midcontinent、Southern、WesternおよびCanadian、等のそれぞれのAssociationが構成メンバーとなっている。

3) 理事会の構成：

Three Super Regionsのそれぞれから3名の理事が選出され、またこれらとは別にat large から6名選出され、計15名の理事で通常の議題の審議がなされる。これとは別に、主として会長経験者によって構成されるThe Long Range Planning Committee (=The LRPC) があり、ここでは、より長期的で抜本的な議題の大局的な予備審議がされる。なお、The RSAI本部（The Headquarters）の事務局長にat large の理事ポストの1つが与えられる。

理事の任期は3年で半舷上陸的に継続性が保持されている。会長は原則として、9名のsuper regions選出の理事の中から選ばれる（LRPCの予備審議も参考にして）。最初の1年はVice-President兼President-Electとして、次の2年間正式のPresidentとしてCouncil Meeting (理事会) を主催する。そして次の1年はImmediate-Past President 兼 The LRPC のChairmanとしての役割も果たす（前後4年間の任期）。

また、World CongressではOpening SessionでのPresidential AddressとPlenary SessionでのPresidential Lectureを、そして他の3大国際大会では要請に応じてこれらを、例えば、小生PRSCO選出なので、昨年のソウルでの第16回PRSCO Conference ではPresidential Lecture を、そしてダブリンの第39回European CongressではPresidential Addressをおこなった。

4) International Members の研究分野構成：

日本地域学会（The Japan Section of the RSAI）では経済学者、交通工学者、都市計画者の順に会員数が多いが、国際地域学会ではGeographersが圧倒的に多く、Economists、City Planners、Traffic Engineersがこれに続く。

5) Regional Scienceの本質：

(1) 研究対象としての one-point economy vs. space economy：Regional Scienceの研究対象は空間的（Spatial）な広がりのある“場”を陽表的・積極的に組み込むことによって有効な研究成果が得られるような分野である。経済学理論では、しばしば一国

全体が一点に集中しているかのごとく抽象化・単純化して理論構成する場合がある（つまり距離の概念を捨象）。

例えば、貨幣政策・金融政策を論ずる場合、霞ヶ関（大蔵省）と日本橋（日銀）と丸ノ内（都市銀行）の狭いトライアングルが日本全体であるとみなして議論を進めても損傷するところがない。ところが、企業立地、交通、通信、都市計画、地域環境、等を論ずる場合、space-less な抽象論では核心に触れる本質的な議論ができ得ない。例えば、マクロの交通量（交通台数）がこれこれで交通投資としてこれこれ必要としてみたところでほとんど説得力がない。

すなわち、東名高速道路の川崎料金所での1日当たり総台数が8万5000としても、その内訳としてOrigin→Destination表示で東京→伊豆が2万、東京→神戸が1万、東京→名古屋2万5000、東京→静岡が3万というように、空間的な場での情報としての交通量が捉えられてはじめて、第二東名高速道路に何千億、厚木→伊豆道路に何百億円というように、納得的な公共投資のプロポーザルがなされるのである。ここに、Theoretical Economics等のdisciplinesとは異なるRegional Scienceの固有の存在理由（raison d'être）がある。

(2) 最近の研究分野：上述のように、空間的な広がりのある場を本質的・陽表的な形で取り扱うべき分野において、それに呼応してそれぞれの学問が発展してきている。立地論（location theory）、地域（間）産業連関分析、GIS分析、都市計画、交通量解析、公共投資論、地域環境、等の学問分野である。ここから、交通量予測、地域経済成長と地域格差是正の両立性問題、地域環境の最適制御、等の具体的研究テ

ーマが出てくる。これらのなかで筆者自身のテーマをさらに敷衍すれば、公共投資の最適編成（高速道路・新幹線投資などのインターチェンジ区間別最適編成；アジア・高速道路網の中国経済に与える動学的影響）、巨大都市の最適編成（首都機能の＜非＞移転）、日本農業の再発展策（作付の動学的最適編成）、そして最近の“21世紀型「地域」の最適編成”（県庁廃止、広域市町村化、中央官庁と300の「市」との間の電脳空間での行政行為の最適化）、等となる。

6) 現状での問題点

(1) 国際会員数が2000人前後で停滞していること：通常の国際学会、例えば環境学会、グリーン・クラブ(仮称)等では、会員数は5000人とか1万人のオーダーであるが、The RSAIでは数式を含んだ論文を発表することが leading academic traditionsとなっている関係で、大学に籍を置く学者以外の行政官等の加入があまり進まない。

ただし、ここで2000人前後の停滞への憂慮は各国のsections, super regions, Headquartersの各レベルのうち第3段階、国際学会本部事務局分についてであり、各国のsectionsの中のDomesticメンバーをも合算すればもちろん10,000人のオーダーの会員を擁している。そして‘地域学’に関係する潜在的な会員は30,000人に達すると判断している。念の為

(2) 政策当局への提言、勧告に直結していない：The Japan Sectionの場合はともかく、Internationalな学会ではGeographersがmajorityを占める関係で、positive vs. normative analysisのうち前者の解析的研究に重きを置き、政策への応用を急がない傾向がある。

(3) 第三世界(The 3rd World)への浸透が本格化していない、(4)

年会費が割高で、会員増強へのバリアとなる、(5)機関誌のコストダウン等：これらについてはこれからの課題で後述。

2. これからのThe RSAI

—Presidential Addressの内包—

1) 第5回国際地域学会世界大会への評価

(1) 第5回でのSession運営：PlenaryとConcurrentとに分けて、それぞれのsessionにTwo Chairpersons：Two Discussants方式を導入し、それぞれのSession Themeに応じた専門の研究者を厳密に割り付けた（これで、この国際会議を単なる“お祭り”ではないfrontier breakthroughな格調の高い学術的workshop的“場”とすることができ得た。

(2) 日本学術会議との共同主催で天皇・皇后両陛下の御光臨を仰ぎ得た：このニュースが十分に知らされていない外国からの参加者は思いがけず開会式で天皇陛下から‘お言葉’をいただき、ティーパーティーでは直接拝顔の栄に浴せたことに感激ひとしおであり、そして大会終了後、外国の会員から時が経過しても減衰しない称賛と評価を得ている。

(3) 今後、凌駕し得ない高い水準を示したとの評価：Council MeetingでProf. Dr. Peter Nijkamp、等のAdvisory Groupから標記のような正式の評価を受けた。

2) The Third World への浸透の必要性・社会的有意義性

2000人規模の膠着状況からの脱却、より政策提言学会となるべきこと、等の諸問題、諸課題は国連方式的に第三世界に浸透し、布教していくことによ

って迂回して結果的に達成されようし、またそれ自体社会的有意義性 (social meaningfulness) のある貢献といえよう。このような気運が1996年の第5回世界大会において醸成され、次の第6回は、第三世界の象徴的存在である南アフリカ共和国で、Council Meeting等で議論が進められた。

しかし、結果として第6回はスイスのルガーノ (2000年5月) でとなり、南アフリカでは次の次の第7回をということになっている。2000年1月22～26日には、南アフリカで第7回への助走としての「国際シンポジウム」が開かれる (約100人規模で)。

3) 何をなすべきか

～これから採択すべき処方箋～

(1) Members Doubling Plan (国際会員倍増計画) : 主として、第三世界の各国の政府、有力研究者に働きかけて、各国別のSection (支部) の設立 (あるいは、ある地域全体をまとめて一つのSection) を促す。これが成功裡に一巡すれば、そのインパクトで先進地域での未加入の国々も加入が促され、すでに加入している国々の会員数も増強されていくであろう。それで4000人規模への倍増は達成に向かおう。しかし、そのためには年会費額の抜本的改革 (低減) が待たれる。

(2) 垂直的各国別実質個人会費負担均等化方策 : 国際会員は自国のSectionの年会費、Super Regionの事務局への会費納入 (いまのところ、European Congressのみの慣行)、およびThe Headquartersへの会費納入というこれら3機関への会費をそれぞれ支払わねばならない。

もし、第1、第2で過徴収すれば、本部への支払

い意欲が減退する。これには水利権の上流・下流への配分と似たところがある。もし、会費の対価である機関誌の増刷管理を緩めるとなればさらである。いずれにしても、発展途上国の多くの研究者にとって、これら3段階での会費支払いは重負担となる。そこで、この垂直的な支払いを各国別の実質一人当たり所得 (real per capita income) で補整して、どの国の会員も実質年会費負担が均等化するようにして、すなわち発展途上国の会員会費が大幅なディスカウントを受けられるようにして、入会を容易にすることが提案される (ただし、個人がいくつもの学会に入っている場合の水平的総会費増大とは無関係)。

(3) 機関誌印刷のコスト・ダウンへの期待 : ①国際年会費 \$60の対価 : PAPERS IN REGIONAL SCIENCE 年4分冊、International Regional Science Review 年3分冊、および The RSAI Newsletter Jan. May, & Aug. の3分冊を受け取っている。このうち最初のPAPERS in RSは今はSpringer Verlag にアウトソーシングしている。②機関誌印刷のコストダウン : もし、4000冊体制に移行した場合、平均費用曲線が大幅に下方シフトして印刷単価が半減すれば、前項の“…均等化方策”の実現が容易になり、前途に曙光が見出されよう。

4) Bright Future of the RSAI

(1) 理論と応用 (実証)、この永遠に尽きない相剋 : 初期の段階では、理論経済学 (Theoretical Economics) から転向して地域学 (Regional Science) を始めた先輩のなかには、“われわれは食い詰め者のように見られている”と自虐的という先生もおら

れた。理論の側はpureな理論的研究に自負をもち、実証（応用）の側は実際のデータに依拠して現実を直視するところに誇りをもつ。このように双方とも自信と自負、羨望と軽視の葛藤・相剋の連続である。これは各学問分野に普遍的にみられるある意味で宿命でもある（これまでは；第1世代では）。

(2) 「理論」修得後の「政策シミュレーション」への専念：しかし、より後進の世代の学徒にとっては、静学としてのミクロ経済学、マクロ経済学、厚生経済学、公共経済学、そして動学としての最適経済成長論等を学習（研究とは言わない）した後に、Regional Science分野の「政策シミュレーション」等に特化するので、理論vs.実証の矛盾をあまり意識していないであろう（第2世代では）。

(3) Bright Future of the RSAI toward the 21st : ところが、1.-5)-(1)で述べたように、地域科学の研究対象は第1世代が考えるように「応用」の領域ではなく、空間的な広がりやの“場”での研究を陽表的に取り扱う固有のそれであり、理論を学修した者がはじめてよくアプローチできる。ここに、Regional Scienceの存在理由があり、ある意味で理論経済学より、よりLaborious（計量的シミュレーションが中心となるので）ではあるが、研究対象がより多岐にわたり、よりfruitfulなそれであるといえよう。

これからの第3世代はかく思考して、飛躍的な向上を目指した研究に邁進されることを期待する次第である。

5) 第3世代への主役交代

前項の4)で第1世代、第2世代、第3世代という

呼称を用いたので、最後に少し敷衍しておこう（必ずしも暦年に正確ではない）。

(1) 第1世代：もちろんThe RSAの創立者：Dr. Walter Isardを中心とした先達を総称する。William Alonso, Martin J. Beckmann, Leon N. Moses, Benjamin H. Stevens, Rolf Funck, David E. Boyce, G. Konno, Y. Oishi、等の学者を含む。

(2) 第2世代：Geoffrey J. D. Hewingsが18年間、Executive Secretary (→Director) を務めた時期と符号し、ヨーロッパのPeter Nijkamp (オランダのSpinoza Prize Winner) を中心として、アメリカのKingsley E. Haynes, Lay J. Gibson, イギリスのPeter Batey, 台湾のChung -Hsing Yang, Chang-i Hua, 日本T. Fukuchi, Y. Kimura, H. Kohno等。

(3) 第3世代：オーストリアのManfred Fischer、イタリアのAura Reggiani, オランダのRaymond J.G.M. Florax, ニュージーランドのJacques Poot, 台湾のS. Peng, アメリカのDavid A. Plane, Kieran P. Donaghy, そして日本のY. Higano, M. Tawada, A. Fujioka, Y. Miyata, 等の、これから21世紀初頭においての大活躍が期待されるYounger generationをさす。

(4) 次期会長：Prof. Dr. Geoffrey J. D. Hewingsが2000年のVice-President & President-Electとして選出され、そして2001～2年の会長として予定されている。さて、21世紀はいよいよ第3世代の本格的出番である。夢と希望をもって大いに期待しよう。

河野 博忠 (この ひろただ 1932年生)
日本学術会議第3部会員、常磐大学国際学部教授
専門：経済政策